

1970年

## 幼児の人権を重んずる保育を

——保育者の立場から——

青 木 道 代



ある保育研究の集いで、次のような話を聞きました。

——子どもたちが、園の椅子を積み上げてワイワイさわいでいる。その椅子を挟んで数人はそのかげに隠れ、一方は板のようなものを持って棒をふりまわし、まるで戦争ごっこのような様子で、見ている子どもに聞くと、いわく「ゲバ棒ごっこやってんだよ」さて、保育者としてこの種の遊びにどう対処したらよいのだろうか——ということでした。

他の園でもそれに類した遊びが生まれかけているとのことで、改めて、マスコミに敏感な現代の子どもたちについて考えさせられました。どんなことでも、貪欲に吸収してやまない子どもたちにとって、大学紛争問題はたちまちにして「カッコイイ」ごっこ遊びの素材にされてしまうのです。しかし、太平洋戦争中、私の兄たちを含む多くの子どもたちが、戦争ごっこを連日繰り返し

「チャンコロ」だの「ヤンキー」だのと、わけもわからずに、口汚いおとなの言葉を模倣しつつ育ったことを思う時、今、このようなごっこ遊びに興じる子どもたちを、不幸だと思わずにおられませんか。

一九七〇年、安保の年、そして国外においてはベトナム、黒人問題等の年、今までより以上に、社会の激動が予想される年、保育者の一人として、幼児教育に何を望むか……。考えるといわねばならないことが山ほど胸につかえる思いがします。しかし、それを敢えて一言で述べるとしますならば「真に幼児の人権を重んずる保育を」と表現したいと思います。交通事故、誘拐、虐待、遊び場の制限等々、今日の日本ほど小さい子どもにとって住みにくい時代はないのではないかと思われるほどです。即ち、今日ほど幼児の人権が侵されている時代はないといえましょう。

「都市の論理」において著者羽仁五郎氏は、「フィレンツェにおけるルネッサンス建築中、最も美しい建物は、オスベダアレ・デリ・インノチェンティと呼ばれる育児院である」と述べています。(十五頁) 日本では私生児と云って冷たい目で見られる幼児を、インノチェンティ罪なき子らと呼んで最もよい建物、最もよい環境を与えて大切にしたいというその政治の在り方に私は感動しました。

また、昨年九月、本誌に掲載された「世界平和と幼児教育(二)」において、松村康平氏は「幼児への配慮が、その人たちの活動の密度を高めて、人間の実際的可能性の実現する速度をはやめる、そのような幼児観をいだいてふるまう人たち……」(七頁)によってこそ、真の平和は創り出される、と述べています。

「幼児」にとって代表される、この社会で最も弱く、自ら守る力を持たぬ人間が、先ず保護され、おちこぼれなく大切にされる社会、国家、それこそが真の民主的、平和的社会、国家といえるのでしよう。幼児が幼児として正当に遇せられず、小学生が、中学生が、高校生、大学生、そして市民に到る一人一人が、不安と、何かもどかしい不満感を持って、生活せざるを得ないような社会は、社会としてどこか狂っているのではないでしようか。

私たち保育者は、このような狂った社会に住むことを強いられている幼児全体の人權が少しでも尊重されるように、常に、その

実態を把握すると共に、訴え続けて行かねばならないと思えます。私の町の近くに、聾学校があり、時折、その関係者と話をすることがありますが、聾児の教育は早いほどよいといわれておりますのに、山口県下の聾幼児の中で、その十分な教育を受けているのは皆無に等しいありません。よい教師とよい施設を整えればすぐにでも出来ることを「予算がない」の一言で、どんなに多くの良心的な教育者たちが涙をのんで忍んでいることでしょう。

また、盲幼児を、一年間ずつ二人、私の園で一般の園児と共に保育したことがあります。盲学校に入学して教師が驚くほど、在園中の一年間に、よい交わりと生活訓練を身につけることが出来ました。普通児も何へだてなくその幼児と交わり、しかも、目が不自由であることに對するやさしい配慮を身につけることが出来ました。A君というその盲児はすもうが強く「A君A君」と園全体の人気でした。しかし、これも教師一人当たりに対する園児の数が適当であったからこそ、できたことであり、時によっては一人が四十人も受け持たねばならないような日本の幼児教育の現状の中では望むべくもありません。悪い施設、おおぜいの子どもたち、安い待遇、それらの悪い環境の中で、それでも何とか、よい子を育て上げようと、歯を喰いしばって頑張っているのが、多くの幼児教育施設教育者の実態ではないでしようか。

幼児一人一人に、国として児童手当を考慮するとか、私立の施

設に手厚い援助をするとか、なすべき手段は、どのようにでも考えられましよう。最新型のジェット機を何台か作る費用、全世界の国が参加するのではない万国博のための巨大な投資、それを、人間形成のためにこんなに必要とされている方面へと振り向けられないものかと、憤りさえおぼえます。

このように、多くの問題を感じながら、私たちは毎日毎日、幼児を迎え、共に遊び、共に考え、いっしょに本を読み、そして家庭へと送ります。次の世代を担う一人一人だと思えば、交す言葉の一つ一つにも細心の配慮をします。

さて、はじめにあげたゲバ棒ごっこの始末をどうするか、この話を聞いたあとと保育者同士数人で話し合ったのですが、そのおおよその結論を述べて、一九七〇年の保育に臨む私の態度も汲みとっていただければと思います。

——危険はないかどうか配慮しながらしばらくようすを見ている。一思ついたところで子どものそばに行き、話し合ってみる。

T「今の遊びはじめて見たけど、なにごっこ？」 C「ゲバ棒ごっこ」 C「ゼンガクレンとキドウタイとけんかするんだ」 C「カッコイイでしよう？」 T「どっちがかっこいいの？」 C「キドウタイさ」 C「いや、ゼンガクレンだよ」(この辺でそろそろ家族の人たちの思想傾向が見えてくる) C「ゼンガクレン悪いんだよ」 T「どうして？」 C「だって石なげたり、火をなげたりするんだ

もん」 C「だけどキドウタイだって、ホースで水うんとかけたりしたよ」 C「でもつかまるのは、みんなゼンガクレンだよ。だからゼンガクレンが悪いんだよ」 T「つかまる人はみんな悪い人？」 C「そうだよ、ケイサツは悪い人つかまえるんだから」

T「この間、AちゃんとBちゃん、砂のぶつけっこしてたね。ようちえんじゃ、砂なげちゃいけないことになっていたけど」 A「しょうがないんだ、ぼく、ものすごーくはらがたったんだ。だってBくん、ひどいことするんだもん」 T「そうね、いけないってわかっていても、石なげたりってこともあるね」 C「きつとなにかおこってるんだよ、いやなことがあったんだよ、だから、あんなことするのかねえ」 C「だけどうちのパパ、ぼくがらんぼうするとすぐ『そんなことする子はゼンガクレンみたいになるぞ！』っていうよ」 C「ようちえんでするように、けんかする人や、みてた人みんなあつめて、よく、わけをきいてそうだんすればいいのね！」

教師自身もこの問題に多くの矛盾を感じてはつきりと結論を与えることは出来ない。しかし「つかまるものはいつも悪い」的な単純な理解には疑問を投げかけておく。子ども自身が答えているように「みんながあつまって、よくわけをいいあって、そうだんする」そういう社会を、まず幼児集団の中でがっちり作り上げていきたい。そのような保育を、と私は望んでいる。